

三江線の旅 ②

ローカル鉄道「三江線」で辿る石見の国 ①

* 広島から芸備線と三江線を乗り継いで粕淵へ

わが家を6時に出て可部線で広島駅に着いたとき、芸備線の列車が出る9番線ホームは閑散としていたが、発車の時間が迫るにつれて人影が増え、4両の気動車が連結された三次行の列車は、ほぼ満席になった。

立っている乗客もいる。寂れが酷いと伝えられるローカル線とは思えない賑わいに、芸備線はまだまだ元気なのだと感心していたら、広島から2つ目の戸坂駅で城北学園の生徒が、さらに4つ目の玖村駅で高陽高校の生徒が下りると、車内はがらがらに変わった。

これで中国山地へ向かう芸備線らしくなると窓際に座り直して、車窓に映る景観の変化を愉しむ。山陽と山陰を結んでいる芸備線は、かつて出雲大社や松江、鳥取など日本海の沿岸各地を訪ねる旅に度々利用し、スキーをしていた頃には備後落合で木次線に乗り換えて三井の原へ通い詰めた。だが、それらはもう半世紀も前のことで、車で旅をするようになった近頃はすっかりご無沙汰している。



芸備線は陰陽の分水嶺がある向原までは県道37号に沿い、その先は国道54号と交差しながら北上していくので、ドライブで見慣れているた景色のはずだが、乗用車と列車では視線の高さが違い、遠くの山に霧が漂う景色などが新鮮に感じられていつのまにか窓辺に惹きつけられていた。

下深川駅で停車している時間がやけに長いと思ったら、私たちが乗車していた後ろ2両はここで切り離されて広島へ引き返すという。のんきにお喋りを交わしていたので驚き、座席に広げていた手荷物をわしづかみにして前の車両に飛び移る。

きちんとした案内がなかったことを運転手に問いただすと、アナウンスがあった筈という。だが、私たち5人の仲間は誰ひとり耳に留めていない。近くの乗客が教えてくれなかったら、大変なことになるところだった。たったの2両で走るローカルの列車、車掌が車内を回りながら注意を喚起してくれても良さそうなものだが、いまだ国鉄時代の旧習が抜け切れていないように思われて腹が立つ。

下深川駅からは2両連結の気動車がワンマン・コントロールで三次へ向かう。車内に車掌が乗務していないので、無人駅では運転席に近接している先頭車両のドアだけが開閉されて出口になる。



ひとりしか乗務していない運転手が、車掌から駅員までも兼ねているため、乗り降りに時間が掛かる。客が少ないのでなんとかなっているが、その対応がまだるっこしくみえて、傍目ながら、つい苛立ってしまう。

かつては夜行の急行列車が走っていた芸備線だが、いまでは身も心も田舎をのんびりと走るローカル気分の鉄道に変貌していることを思い知らされた。

三次駅で石見川本行き三江線に乗り換える。ここからは気動車が一両だけでとことこと走るひとり旅である。

黒い瓦の屋根が連なる三次の町並みを眺めながら北上して、尾関山の麓をかすめるように左へ大きくカーブを切り、江の川を渡ってからは、ゆったりした大河の流れに沿いながら左岸を西へ向かっていく。

さすが中国太郎と呼ばれるだけあってずいぶん大きな川だ。水量が豊かな滔々とした流れで、岸边にまで水が満ちていて、砂利の川原がみえない。

淀んでいる淵を思わせる緩慢な流ればかりなのかと思ったら、ときおり白く泡立つ瀬も現われる。思いのほか気性が荒い川なのかも知れない。江の川は昔から中国山地と海辺の地域をつなぐ主要な物流ルートだったが、この様子では物流を担っていた舟運も大変な苦勞を強いられたことと思われる。

向う岸に目をやると、切り立った崖の裾を縫うように車が走っている。国道375号と思われる。国道とは名ばかりで、離合するのが難しい狭い個所が幾つもある。ひやひやししながらドライブしたことが思い出される。

鉄道と呼ぶには似つかわしくない、バスのようにたったの一両で走る気動車は、山の斜面と川に挟まれた狭い隙間を川の流れに沿いながら進んでいく。車が往来する街道とは水の流れて隔てられているので、埃っぽい騒音は雑木の林と水面に吸い込まれて、静かな自然を縫うように走り抜けていく列車の走りは格別なものがある。聞こえてくるのは車輪がレールの継ぎ目を拾うコツコツという音だけだ。

三江線が辿っている川の左岸にはほとんど人家のかたまりが目につかないが、それでもぼつん、ぼつんと小さな駅が設けられているので、前方に駅のホームが見えると運転手は几帳面に停車を繰り返す。駅の周辺には人影がないし、客の乗り降りも滅多にない。

三次を出発したとき25人だった乗客は、私たちが下車した粕淵駅までの19駅で8人増えて13人が下車した。だが、そのうちの8人は温泉の施設がある潮駅で降りた団体な



ので、私たち5人の仲間を差し引くと一般の乗客は一桁だったことになる。

芸備線の鉄路は、式敷駅を過ぎると鉄橋を渡って右岸に変わるものの、その先でトンネルを抜けて再び左岸に戻るなど、川の流れと纏れ合うように北上していく。



江の川も大きく湾曲して、西に向かっていた流れが北向きに変っていた。

迷路へ迷い込んだように方角が分からなくなり、念のため地図で確かめると、いったん北に向きを変えた江の川は粕淵の周辺で反転し、それからは緩やかに南西へ流れ下っていくことに気づかされた。



中国の西域を旅したとき、やはり黄河の流れが大きく湾曲して方向を反転させていたので方角の判断を迷わされたことがある。地形の上下に合わせて、自然のままに流れ下っているように見える水の流れが、ときに思いもよらない悪戯をすることに驚かされる。

短いトンネルが連続している。トンネルを抜け、次のトンネルに向かって狭い山あいをつなぐ鉄橋を渡っていくと、その中央に「天

空の駅」と呼ばれるようになった宇都井駅が現われた。停車の時間が短かく、外に出て駅を見上げる写真を撮ることが出来なかったので、駅から見下ろす光景をカメラに収めた。

* 柿本人麻呂が終焉の地

粕淵駅に着いたのは11時35分、広島を出たのが早朝だったので、もう、ひと仕事を済ませたような気分だ。列車の座席に座っているだけで疲れたのは、江の川の雄大な眺めに当てられたのかも知れない。

* 柿本人麻呂が終焉の地

粕淵駅に着いたのは11時35分、広島を出たのが早朝だったので、もう、ひと仕事を済ませたような気分だ。列車の座席に座っているだけで疲れたのは、江の川の雄大な眺めに当てられたのかも知れない。

赤字路線の費用切り詰めで人員削減が徹底している三江線だが、粕淵と石見川本の2駅には駅員が配備されている聞いたのに、粕淵駅のどこにも人の気配がない。がらんとした待合室は寒々としていて、テーブルに置かれているパンフレットと、壁に貼られたポスタ

一が、私たち5人の訪問客をそっけなく迎えてくれた。

ここ粕淵は、歌人として著名な柿本人麻呂が終焉を迎えた地として知られ、湯抱温泉もあるというのに、駅の周辺を見渡しても、観光地らしい華やいだ雰囲気は少しも感じられない。ライトアップによって三江線の観光スポットに仕立てられようとしている「天空の駅」を通過したときにも、車内のアナウンスはなかった。

地元の魅力をアピールすることに積極的な「出雲」と違って、「石見」は何事につけて地味で、奥ゆかしい風土だといわれるが、情報を発信せず、寡黙なままでは、地域にある宝が世に知られようもない。三江線が廃れるのも致し方ないような気にさせられた。

柿本人麻呂ゆかりの地を巡る前に腹ごしらえをと思ったが、駅の周辺に適当な食事処が見当たらない。やむなく、鴨山公園のベンチで人麻呂を偲びながらランチを食べるのも面白いのではないかと、弁当を買い求めて、タクシーで鴨山公園へ向かう。

駅からは、天気良ければ歩いても行けそうな距離だったが、公園は狭い山あいに入り込んだところで、陽が差し込まない山蔭の薄暗い斜面に築かれている、寂しさが漂うような地味な公園だった。

細い山道の階段に降り積もっている湿った落葉を踏みしめながら丘へ上がっていくと、桜の古木に囲まれた一郭に、「人麿がつひのいのちををわりたる 鴨山をしもここに定めむ」と刻まれた斉藤茂吉の歌碑があり、その傍らに、大木を断ち割ったような厚



手の板で造られたテーブルとベンチが据えられている東屋がたっていた。辺りには枯れ枝が積み重なるように散らばっている。

こんなところで、柿本人麻呂が終焉を迎えたのかと思ったら、ここは、人麻呂が国司として赴任した石見の国で結ばれて、数多くの相聞歌を交わしていた最愛の妻・依羅娘子へ死に臨んで残した辞世の句、

『鴨山の磐根しまける吾をかも 知らにと妹の待ちつつあらむ』

を詠んだとされる「鴨山」を林間の彼方に望める地として、斉藤茂吉が探し出したポイントということらしい。

斉藤茂吉が人麿の足跡をたどるために費やした情熱は大変なもので、人麿の終焉の地とされる鴨山を探し求めて石見の地を何度となく訪れ、ようやく、ここを終焉の地と定めるに至ったと伝えられる。

それらの記録は、近くに建つ、地元的美郷町が運営する「斉藤茂吉鴨山記念館」に残されている。記念館から湯抱温泉へ辿る道のあちこちにみられる数多くの歌碑からも茂吉の深い思い入れが察せられる。

茂吉がそれほど強く惹かれた柿本人麻呂とはどんな人物だったのか、私は歌人というこ

としか知らないでいたが、国司に任じられたことからすると、都でもひとかどの位置を占めていた高位の役人であったと思われる。

念のため、小学館から出されている国語大辞典「言泉」を引いてみたら、次のような歌人としての紹介に終始して、役人としての詳しい記述は得られなかった。

柿本人麻呂：『万葉歌人。持統・文武両天皇に仕えた宮廷歌人という。雄大荘重な長歌の



形式を完成する一方、和歌においては抒情詩人として高い成熟度を示し、万葉歌人中の第一人者とされる。和銅（708～715年）の始め頃、50歳ぐらいで任地の石見の国で死んだという。後世、歌聖とあがめられた。』



鴨山公園に佇んで、彼方にみえる鴨山の姿をしっかりと目に焼き付けてから、山あいこの道をぶらぶらと下って齊藤茂吉鴨山記念館を訪ね、人麻呂にかけた茂吉の熱意をお浚いし、茂吉も好んでいたという湯抱温泉に投宿して旅の疲れを癒した。

泊まったのは日の出旅館。大きな宿なのに泊まり客が私だけだったので、湯船から溢れ出る湯がつくりだす千枚田のような自然の造作に見惚れながら、気ままに長湯を満喫した。

三瓶山の周辺各地に湧ている温泉は鉄分が多い赤茶色の弱食塩泉で、リュウマチや神経痛、切り傷、皮膚炎に効果があるという。泥水のように濁っているため湯に浸けたタオルは茶色になるところが多いが、湯抱温泉の湯はそれほどひどくなく、温泉の炭酸分が優しく疲れを和らげてくれるようで心地よかった。